詠歌之大概

詞不可出

情以新為先 求人未詠之心詠之 詞以蘊為用 二代集先

達之所用新古今古人亦同之用 風騒 文場 詩人 表奇

不論古今意巧之 自三代以後 代代人所詠出 心詞唯一句

謹可除奇之 七十年来人所詠出之詞 不可取用 於古歌者

多以其同詞詠之 已為流俗 但取古歌

新奇事者之中及三句者 頗出分 注

京都大学図書館蔵書

上洛泉飲為翻卿詠歌之大概

一冊

六半本 文政九 川宗

氣三句之上三四字完之猶おもふ以間事
詠古詩題之会歌以花詠花以月詠月以四季歌
意雅哉以意雅哉詠四季哉哉
時之歌古詩し難歌
あしひきの山郭公ほとゝぎす
久かたの月待つ時なるや五月
むかしこの道しいん
めしき事全雖何度不怪之

年代ゆ春はきにけりわ月あれ
春や昔ときはなるもの
ゆめ
めしし類改二句更ふ詠之
常歌会古詩之景氣哉深窠の見物
春古今伊勢物語後撰拾遺三十六集
内詩上手歌可賦人麿貫之忠岑
伊勢小町赤し類雖非
和哉之先達何節之景氣世間之

感書為和白氏文集第一第二帙
常有悵悩し深通和哥
心
和歌無師匠以舊歌為師染於
古風習詞於先達之者誰人不詠
之
秀歌之躰大略
随老耄之時覧懐舊遺之古今
相交穢以揩之極秘
春日はくかすみわたるやよし野の
里の
山のかすみてし朝みゆき
君かため春の野に出てわかなつむ
ころも手に雪はふりつゝ
梅かえをよそにきゝそふ鶯の
はね白妙にあわ雪そふる
梅か枝にきゐる鶯みしかたの久方の
あまきる雪のなへてふれゝは
人をまつとてあかしもすさみ

花ぞむかしの香ににほひける
さくら花さきにけらしなあしひきの
山のかひよりみゆる白雲
もゝしきの大宮人はいとまあれや
さくらかさしてけふもくらしつ
山桜さきそめしよりひさかたの
雲ゐにみゆる瀧の白糸
櫻さくとを山とりのしたりをの
なかなかし日もあかぬ色かな
をしなへて花のさかりになりにけり
山のはことにかゝる白雲
いさけふは春の山邊にまじりなん
くれなはなけの花の陰かは
櫻かりあめはふりきぬおなしくは
ぬるとも花の陰にかくれん
花の色はうつりにけりないたつらに

しるしとせよとふもなつかしきまゝに
またやみむかたのゝみ野ゝさくらかり
花の雪ちる春の明ほの
久かたのひかりのとけき春の日に
しつ心なく花のちるらん
あすよりは志賀の花園まれにたに
たれかはとはむ春のふるさと
春すきて夏きにけらし白妙乃
衣ほすてふあまのかく山
見わたせは浪のしからみかけてけり
卯の花さける玉川の里
五月雨はたくもの煙うちしめり
しほたれまさるすまの浦人
道のへに清水なかるゝ柳かけ
しはしとてこそ立とまりつれ
をのつから涼しくもあるか夏衣

日もゆふ暮れ雨の名おしみ
しはしとてもおもかけぬ年月を
みそきするなる夜にくれしなる
秋来ぬといつかはおもひねにみね
あさけの風そ秋をしらする
八重むくらしけれる宿のさひしきに
人こそみえね秋はきにけり
秋そきぬるやらむもろともにねとや

ろ秋なく風のたよりにて涼ん
おもはしる草葉の露のこほるらん
秋ならと池ね宮城野の原
月みれは千ゝに物こそかなしけれ
我身ひとつの秋にはあらねと
百帰乃雲とおもふの小萩さきにけり
よしとし庭に月まつろぬ
あまてる舟て花野のむしの秋はかりて

色なふはら月やうわ
なみたてなきちしをかれ
月の宮こそ明かりそ
秋の露やなにとゝまらぬ
なりき立ゆるを泡る月
俳和歌海なみやおちつん
物おもふ泡とうきの人露
てきうれちるんをの露相

ねまてをゆしさ立ゆつ
秋の田ちわすの庵乃泡とあみ
ゆゝ衣手は露わねまて
白露り風乃ゆゝく秋の花
ちゝねきこめねむ寄計る
龍田姫ゆゝの袖をとゝみ
みゝなゝわゝ乃移る白露
ゝ雲波ちゝかけてゆく漢

門田のいなばの夕なみに
秋風ふきそめてうら葉わたる
物おもふ人の庵とをとかの南
千ちひろ川瀬のをとに夜さへ
ふきしおれの一枝の露をそそぐ夜
ふるるあまぐも海てしり物を
秋の寝ぬ人もあるかなわびわ
夕ぐれ門田のいなば秋ふかし
あしまろ風の秋風ふきて
ふるしほをあらなわびわ
ふるまつ山の秋のゆふぎり
ふるさとの昔にあらぬ秋風の
ほのかなるかたのそよぎまき
吹うつる秋の草まのしろきに
むしのこゑをいのちとしるん
ふるかりの雁ぬ海山のをとなる

こさ田はまた霜はおかねとも
おく山に紅葉ふみわけなく鹿の
声きく時そ秋はかなしき
秋風の吹上にたてる志ら菊は
花かあらぬか波のよするか
心あてにおらはやおらむ初霜の
をきまとはせる志ら菊の花
志ら露も時雨もいたくもる山は
下葉のこらす色つきにけり
たつた川紅葉ゝなかる神なひの
みむろの山に時雨ふるらし
秋はきぬ紅葉は庭にふりしきぬ
道ふみわけてとふ人もなし
ちはやふる神代もきかす立田川
からくれなゐに水くゝるとは
やまかはに風のかけたる志からみは

ちり積もあへぬ紅葉なりけり
ふかくゐと有明の月は月霜り
こゝみちはおくらで山嵐のをと
あさみちやまさかたまそひかねていさまらん
ますみつ時雨のふるは秋の秋久
秋は神はやと山のはさしや志ら露
ほとゝぎすなけは雲のうへと積る
冬ちもしおの森林はちら葉の霜のうへみ

おちつもる月の霜乃きむ計り
君こそはちらやねなんとて紅葉の
み山をろしにちる霜夜を
かくやきの袖はおかれもむすほれ
らけく袖ね空夜乃夢そうき
矢田の野に浅茅色つくあらち山
みねのあわ雪さむくそあるらし
あるはたゝは笹野にふしてねやかれて

ひとわたり雪ふりぬれば日いたく
今よりとしをかさねてゆく末の千歳の
ためしをかぎりなき雪
朝ぼらけ雪ふりつもれる月のみかげ
よりはなほまさるなりけり雪
いとのどかなるよりをとゝ藤袴をゝて
一枝をこうちのぞくとうれ
ゝ代をかさねてそ思ふ神ぞ
御ぞんすそ川乃ぞんすむきわい
未の雪ふりはやせ中乃
をとしやうなるん
みるゝ人をあはれとぞ思ぬなわ
ぞ山ぬりてふかゝ紅にをゝ
をゝ流ぞりぞ山ふゝちまて
うはをしれねをうんをゝ和き
ふきうわきにうあきをゝ川藤衣

あるなき物ぞ涙なりけるを
におもひ出る折もし紫の雲をまちて
むせびつゝそらにしられけるみゝ
なき人のあとの雲やしほれるらむ
様ふへの雨にかきそみへねと
おもひ出もしらいなきぬ山の峯よする
まろとしきうらん今こそ見えてたゞも
志つる雲のへ雲まよひさゞなみをちかみて

おもふ人の心へかな川を
まつりかみにうらみ命をも涙にぞよ
面影を見てはいと梅とおもふよ
いさらぬそせめうつゝへてさ白山
そめても紅葉にみかき神のてみく
雑はん何やかなう風よ霜ふらて
すそはよ袖乃玉あやるつで
もうあてよ又見きかでこむ於しまや

あしたみとりや波のかすみする
はるかなる桜へきえし山のはのあしや
みなせ川月乃末のしら雲
難波江の蘆のよしあしめてむすふも
わすれしてふしに人を恋わたるや
ふるさとの雲ゐにかかるみねのたかね
木のはちる下つゆに色かはるとも
はつ霜の花の仕をかけし橋のはてのを

思ひしるかたしもなき人のなきさ
浅茅生の小野の篠原しのふれと
あまりてなとか人の恋しき
めくりきて空の鳴よやとこそわすれね
恋すてふわかなはまたきたつとこそ思ひそめしか
久かたの雲ゐをそてに袖そぬれける
あすはかはしるへ人をまちて
難波かたみしかき芦のふしのまも

あふれしたしよのなとゐこしてよとや
うきのかくるふ人とも瀬の山もなうよ
なかましかはいのちね猶を
瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川の
われても末にあはむとそおもふ
ながれし河のそこへ流かゝる水も浅の
うきぬ人よなかて消めや
なき流もむす人の袖はさらけて

いさまこ人をうきよのきなし
見るみをとこれからなたまよわかれて
おもひはほかをも玉の緒よをん
思草紫芋まるよむしたゞ露ゝ
たまくすてい手に手をぬまるれ
なかひめやまちかりきかきつせて
百六悦をおそゝしまうねせんとよ
右門のはまあつかんにしかりよそ

あつきいつとうき物をば
名ゐわにをの浦本にのこれば
いつまんとにはかなむ今めん
今はむとのひとりとわるに長月の
あを月の月を待出いる心
降事をとゝ出てわのわるも
きていらひるき袖をのこそあく
あしきやとり鳥の尾のまとわ
おの

あつきいつとうき物をば
名ゐわにをの浦本にのこれば
いつまんとにはかなむ今めん
今はむとのひとりとわるに長月の
あを月の月を待出いる心
降事をとゝ出てわのわるも
きていらひるき袖をのこそあく
あしきやとり鳥の尾のまとわ
おの

あつて袖をとわかをねむ
しらむねをは今ゝなる〜袖はる
ゝをつゝてをあをむと地四
我意を庭むゝなる〜ゝ
人ををゝ秋乃夕雲
袖の露をわゝねをふをきゝゝ
をゝにきゝゝるなを袖をまに
なゝゝあるゝ紅をもゝ乃ゝ

いそねてあまえ〜きすのを
聚あきらかりぬみよ神と言わて
すまの松山泊こそ〜〜ふ
まるとて月や宵乃を待ちする
ふこちらふるふ我涙ゝる

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001925625